

三六九一番

天地あめつちと 共にとももがもと 思おもひつつ ありけむもの  
 を はしけやし 家いへを離はなれて 波なみの上うへゆ なづさ  
 ひ来きにて あらたまの 月つき日も来き経へぬ 雁かりがねも  
 継つぎて来き鳴なけば たらちねの 母ははも妻つまらも 朝露あさつゆ  
 に 裳もの裾すそひづち 夕霧ゆふぎりに 衣ころも手で濡ぬれて 幸さきく  
 しも あるらむごとく 出いで見みつつ 待まつらむも  
 のを 世よの中なかの 人ひとの嘆なげきは 相あひ思おもはぬ 君きみにあ  
 れやも 秋萩あきはぎの 散ちらへる野の辺への 初尾花はつをばな 仮廬かりほ  
 に 暮ふきて 雲離くもばなれ 遠とほき国くに辺への 露霜つゆしもの 寒さむき山やま  
 辺へに 宿やどりせるらむ

反歌二首

三六九二番

はしけやし 妻つまも子こどもも 高たか々たかに 待まつらむ君きみ  
 や 山やま隠かくれぬる

三六九三番

もみち葉はの 散ちりなむ山やまに 宿やどりぬる 君きみを待まつ  
 らむ 人ひとしかなしも